

古代ギリシアの職人奴隷

—アリストパネエスの奴隷たち—

河 底 尚 吾

I. 職人奴隷

§1. 職人としての奴隷

屋内で仕事をする奴隷のうち、職業的技術を身につけた者が、主人のために手足となって労働するばあい、一般の家庭奴隷とかなりちがった性格が見うけられる。

そのもっとも顕著な相違は、職人奴隷は家庭奴隷にくらべて自由人との区別がつけにくいということである。たとえば、玄関番、荷物運搬、子守り、炊事、水汲み、機織、等は自由市民の仕事ではなく、奴隷が専従する分野であったことは明白であるが¹⁾、他方、煉瓦工、革なめし、布さらし、車大工、船大工、馭者、楯工、吹笛き、それに農夫や鋤夫、等²⁾は、一見して、自由職人と奴隷職人との区別はつけがたい。しかし、それらの職業に奴隷がたずさわっていたことは確かであり、しかも、奴隷は独立してその仕事をいとなんでいたわけではなく、たえず自由市民の主人や仲間の監視のもとで働いていたことは、他の家庭奴隷と同様であったと思われる。

アリストパネエスの作品には、それらの職人奴隷がかなり戯画化されて登場するが、まず職人奴隷がたずさわると思われる職業が列挙されている例を、つぎに紹介しておこう。これは「福の神」が視力をうしなって農民たちの保護をうけているところに、「貧乏神」があらわれ、農民と論議をする場面の一部である³⁾。

貧乏神

…万一、福の神がまた見えるようになって、みんなが平等にあいつを分配されれば、技術にしろ知恵にしろ、気に留める人間なんかだれもいなくなるだろう。お前さんたちの間でこの二つのものが消えてなくなったら、だれが鋳物をしたり、船を造ったり、縫い物をしたり、車輪をこしらえたり、また靴をつくったり、煉瓦を焼いたり、洗濯をしたり、革をなめしたり、鋤^{すき}で地面を砕いてデエメエテル様の収穫を刈り取るなんて望む者がいるだろうか、こんなことはまったく気にしなくても、仕事をしないで生きてゆけるんだからね？

クレミュロス

ばか言え、あんたがいま並べたてたことはみんな、奉公人たち (therapontes) が骨折ってくれる。

貧乏神

それじゃ、どこからその奉公人たちを手に入れるのだ？

クレミュロス

もちろん銀貨で買うんだ。

ここにあげられている仕事はすべて一般家庭での奴隷の仕事であるというよりは、もっと範囲の広い職場での仕事であることは明かであろう。しかし、これらの職業のすべてに奴隷がたずさわっていたかどうかは疑問である。そのことについてはあとで検討することとして、いま注目すべき事実は、ここにのべられた仕事を

「骨折ってくれる」奴隷の名称が、*θεράφοντες* (theraphontes) ということばで表現されていることである。

theraphōn (テラポォン) というのは、奴隷の名称としては穏健なことばで⁴⁾、アリストパネエスの配慮が充分うかがえるのであるが、それは同時に、これらの職業が奴隷専従のものとするにはためらいを感じた結果であろうと思われる。theraphōn の本質的な意味は、神に対する「奉仕者」であり、それがしだいに人間社会の権力者や上司に対する奉仕をもふくむようになった。それは自由市民の奉仕者もふくんでいるわけで、したがって、これらの仕事が奴隷だけではなく、市民のばあいにもあてはまることをも暗示しているのである。

その意味において、職業奴隷については、家庭内奴隷の仕事よりも、さらにいっそう仕事の内容をくわしく吟味しながらそれに従事する者を浮彫りにする必要があるだろう。

§2. 鍛冶工

鍛冶は神話をもち出すまでもなく、とても奴隷の仕事とは思われないが⁵⁾、神に仕える意味の theraphōn が人間に仕えるばあいを使用されるようになった事実を考えると、鍛冶の術はヘパイストス神から人間へ⁶⁾、さらに奴隷の手へと移行したことは不自然ではない。

たしかに、鍛冶業にたずさわる者は自由市民である例が多く、奴隷は容易に近づけなかったように思われる。

ヘエロドトスがのべている有名な鍛冶屋の話もその一例であろう。ラケダイモォン人がテゲアと一戦をまじえていたとき、デルポイの神託をうけ、オレステュスの遺骨をさがして国に持ち帰れば勝利をえると知り、ラケダイモォン人たちは諸国をたずねてその骨をさがしまわったが思うように発見できなかった。そのときスパルタのリカスという男が、ラゲアにのりこみ、その国の鍛冶屋から自分の家の庭で井戸を掘っているとき大きな死骸を発見した話をきく。リ

カスはそれこそオレステュスの遺骸であることに気づく。つまり、神託のなかに、「強い力にうごかされ、二つの風がふいている」とか、「一撃すれば反撃し、禍難は禍難の上に横たわる」ということばがあり、それが目のまえで鍛冶屋が使っている「ふいご」と「鉄床と槌」に符合したからである⁶⁾。

このばあい、リカスが目撃した鍛冶屋は一人をかまえている市民の職人である。ここには奴隷の姿は見あたらない。アリストパネエスがとりあつかう鍛冶屋も、その多くは一種の語呂あわせ、もしくはパロディとして、鍛冶の特色をあらわすために使われる。そのことばからは直接奴隷の存在を知ることは困難である。たとえば、腸詰屋はつぎのように鍛冶屋を引きあいにしている⁷⁾。

腸詰屋

あいつがアルゴスでやったことは、おれだっで見のがすわけがない。立てまえとしては、アルゴスをおれたちと仲よくさせようってわけだが、自分ひとりでは、そこでラケダイモォン人と談合してるんだ。ぴったり息が合っていることだっておれは知ってるぞ、捕虜を^{かなど}金床にして鍛冶仕事をしてるんだから。

合唱隊

うまい、うまい、あっちが^{にかわ}膠づけで来るなら、こっちは鍛冶で打ち返せ。

もちろん、ここで言われている鍛冶の意味は、実際の鍛冶労働をさしているわけではなく、アテナイの執政官クレオォンが、敵の捕虜を道具にして和平交渉をするさまを、ふいごで息をふきかけたり、槌でたたいたりする鍛冶屋にたとえたわけである。そこには「奴隷」の労働というよりは、「市民」の意気ごみを感じさせる。

このように、アリストパネエスの作品では、鍛冶労働にたずさわる明確な職人奴隷は登場しない。『福の神』のクレミューロスのことばにあ

られる「或る者は鑄物をつくる」⁹⁾という「或る者」は市民であるし、『鳥』のなかで、鶏が早朝にとぎの声をあげると、とび起きて仕事にかかる「鍛冶屋」⁹⁾も、近所の他の職人たちと同様、アゴラ周辺に住んでいる市民である。

すくなくとも鍛冶屋に関するかぎり、専門家の意見もこの職業を奴隷の仕事とは見なしていないのが現状である。しかし、公役奴隷や一般家庭の奴隷に目を転じて見ると、つねに市民の仕事であったはたおり機織に召使が主婦のかたわらでおなじ仕事をしていたり¹⁰⁾、市民の造幣所でも奴隷が市民にまじって労務に従事していた¹¹⁾、という事実を私たちは見のがすことができない。

前5～4世紀のアテネ社会では、ほとんどすべての職種にわたって奴隷の労働力は自由労働者と同様に必要とされていたし、しかもその労働価値は、市民も奴隷も差別されていなかった¹²⁾。プラトンの『法律』のなかで、アテネからの客人がつぎのように発言しているのも¹³⁾、そのような奴隷に対する社会的条件を考慮すると、きわめて示唆に富むことばであろう。

……ですから、わたしたちの国では、まず第一に、次の原則をたてるべきです。すなわち、何びとも、鍛冶屋であって同時に大工であってはならないし、さらに大工でありながら、自分の仕事よりも、鍛冶屋の仕事をする他人の監督に精を出してはなりません。この場合彼は、自分のために働く多くの奴隷の監督者として、彼らの監督にいっそう精を出すのは、そこからあげられる利益の方が、自分自身の職業からのものより、自分にとって多いのだから当然であるということを口実にします。しかし、国家において、各人はそれぞれ一つの職業を持ち、それによって生活の資を得るべきです。(傍点筆者)

数ある職業のなかから特に鍛冶屋がとりあげられているのは、この仕事が一人の労働では成

りたちがたく、少くとも複数の職人を必要としたことや、市内にあって人目につきやすい職業であることが考えられるが、なによりも現場に奴隷がいたことが根拠になっているというべきであろう。「奴隷の監督者として」市民の職人がいるのは、「アテネの客人」が突差に思いついた作り話ではない、通常の労賃よりも、奴隷の監督の方が利益が多いことを理由に、このような仕事をかけもちでする者がいることを彼は指摘し、厳重にいましめているのである¹⁴⁾。

鍛冶職には、それを本業とするのは一般市民であるのが普通であるが、そのなかには賃銀奴隷もその下働きとしてまじっていたことを私は認めたい。

§3. 靴屋

アクロポリスの北西部にひろがるアゴラには、さまざまな店が軒をならべていたが、現在、発掘によって知られている店の一つに靴屋がある。これは American School of Classical Studies の調査によれば、アゴラ南西部の一角にある境界石の近くに位置していた¹⁵⁾。そのあたりは店が密集していたところで、個人の家屋跡もいくつか発見されている。靴屋はここだけにかぎらず、他の地域でも当然その店があったにちがいない。

このアゴラで発見された靴屋の店は、南ストアの西端とトロス（迎賓館ともいべき高官の食堂）の南側にいくこんだ三角地帯にある建物の一つで、そこの中庭 (18×21 ft.) から多くの靴鉾や靴ひもを通す穴のあいた革が発見され、それによって靴職人の店であることが確認されたのである。また、おなじ場所から発見された酒盃の底に「シモン」という署名があり、この店の所有者の名であろうと推定されている¹⁶⁾。

前5世紀後半のこの店は¹⁷⁾、遺構から見てかなりせまく、大勢の職人がいたとは考えられない。一般的に、個人によって経営されている職場は、ローマ時代のポムペイ (Pompeii) やへ

ルクラネウム (Herculaneum) の遺跡でも見られるように、けっして広くはなく、せいぜい 10 m² 以内の場所をもつにすぎない¹⁸⁾。

靴をつくることは、鍛冶作業とちがって、一人でもできる仕事である。店のせまさはその事実を裏づけているといえるだろう。したがって、自分以外に手助けを必要としない靴職人は、あえて奴隷の手を借りようとはしなかったかもしれない。赤絵の壺絵の一つに靴屋の店の内部をえがいているものがある¹⁹⁾。壁に靴底の型やまだ切りとられていない皮、金槌、完成した半長靴、皮を平らにたたき鉄塊等がかけられ、そのまえで靴職人が椅子に腰かけて仕事をしている図である。人物は一人で、監視役の人物は見あたらない。

また、ペリケという壺に描かれている靴屋の情景はさらにダイナミックである²⁰⁾。中央の仕事台の上に少年が立ち、職人に足の型をとってもらっている。左側に靴職人が椅子に腰かけ、その子の足型にあわせてナイフで皮を切りとっている。右側には一人の男が立ち、じっとその子の足元を見つめている。問題はこの立っている男であるが、彼が手にもっているのは蔦のような植物と一本の杖である。頭には手にもっている蔦とおなじものを巻きつけている。それは靴職人の頭にも巻かれている。T. B. L. Webster はこの人物をその子の父親としているが²¹⁾、その服装や持物から判断して、子守りの奴隷 (*paidagogos*) とも思われる。しかし、いずれにしても、この店の職人でないことはたしかである。上例の赤絵の職人とこのペリケの職人は上半身に衣をつけていないところは共通しているが、それによってこの職人が奴隷であるとは言えない。したがって、靴職人の多くは自由市民であることは、ほぼまちがいないと思われる。

彼らの仕事の性質上、せまい店先で、毎日椅子に腰かけているのも、一般市民の目には見なれた光景であつたらしく、壺絵にもそれがあらわれているし、アリストパネエスのとぼしい靴屋に関する資料にも、「この世のあらゆる技能

も技工もあんだ(福の神)によって発明された。おれたちの或る者は腰かけっぱなしで靴をこしらえている」²²⁾と表現されており、彼の孤独な作業の姿をつたえている。

靴職人には欠かすことができない皮材は、皮なめし職人がつくるわけだが、アリストパネエスの作品では、先にあげた『福の神』に列挙される職名や²³⁾、『鳥』のなかの、これもすでに例としてあげた靴屋とともに名をつらねている²⁴⁾。つまり、皮なめし職は、その職場も仕事の内容も靴職人とほとんど同列に考えられているように思われる。ただし皮革を販売するのは農民だとプラトンは『法律』のなかでのべているが²⁵⁾、これはあくまでも彼の想定される理想的な国制の下での話だとうけとめるべきであろう。ほとんどの製造業は職場が同時に商店でもあった。

§4. 医者

医者については、アリストパネエスだけでなく、プラトオンやアリストテレエス等の哲人によってさまざまな角度から引用や比喻がこころみられている。医者は医術と同義であり、医療技術のよしあしで医者の価値がきまるのは、おそらく現代でも共通するところであろう。最高の医療をのぞむ人間の欲求は、万能の神を指向する。その神は地方によっていくつかにわかれるが、まずはアポロン神、ついでアスクレピオス、ヒュギエイアが医療神として有名であった。

『鳥』のなかで、市民のピステタイロスが鴉に眼球をえぐりとられた牛や羊について、「アポロンが医者なら、あいつらを癒させよう」と皮肉ったり(584行)、『福の神』で奴隷のカリオオンが、「黄金の三脚台から託宣をのべさせるロクンアァス (アポロン) さまに、筋のとあった小言を申したい、皆が言うには賢い医者で占師とのことだが」(8~11行) とのべているのは、アポロンを医療神と見ている例である。

アスクレピオスの信仰は、多くの遺跡によ

って、それを証明することができる。この医療神はギリシア各地に信者をもち、神殿や祠がアッティケだけでなく、ペロポネネソス半島、小アジア近傍の島にもおよぶ。なかでも、エピダウロス、その分祠であるアテナイはアクロポリス、ペイライエウス、アイギナ島、さらに十二諸島の一つコォス島が、その主要な信仰の場所である。『福の神』の序幕も、アスクレピオス参詣の帰途からはじまっている。

アスクレピオスについては、アテネ国立考古学博物館に収蔵されている石像が興味ぶかい。左腕と胸の一部は欠損しているが、顔をやや上に向け、髪の一部が前額にこぼれおちて、ひげの濃い人物として表現されている²⁶⁾。また、信者や患者の姿をあらわしている好例として、アスクレピオス神に奉納された浮彫像が注目される。中央に医療神、そのうしろに彼の息子二人（いずれも医者）と娘三人が従う。医療神に向きあって四人の信者（患者）とその子供二人がなにか訴えている。彼らはヒマティオン（長衣）をまとう市民たちである²⁷⁾、脚部をわずらった患者が奉納したと思われる脚だけの像には、筋立った血管のふくらみが患者の願望を象徴している²⁸⁾。

アスクレピオスの娘の一人がヒュギエイアで、「健康」の意味をもつ。彼女に対する信仰も父神におとらず盛んで、スコパエスによって残された彼女の像は、頭だけではあるが、優雅な微笑のなかに、患者の悲願を受容する余裕が見え、信仰の対象にふさわしい²⁹⁾。

このように患者の祈願がこめられた奉納品や祠、あるいは神殿等は、市民の生活と密着した宗教的な色彩をおびた一種の治療法をしめすものであるが、コォス島のアスクレピエイオンでは、医療の祖といわれるヒポクラテース（前460頃～357）が、科学的な医術によって患者の治療にあった。エピダウロスやアイギナの治療は、神殿の仮眠所でねむっているあいだに、夢のなかで神の暗示をうけ、それに従って治療するという、いわば心霊的な方法であるのに対

し、ヒポクラテースの科学的な治療法は直接患部に施療する点で大きなちがいがあ

もちろん、アテナイで治療にあたった医者はこの科学的な方法にもとづいていたが、アリストパネエスの作品では、両者が混同してあらわれる。アポロン神によびかけるカリオンは心霊的医術を想定しているが、おなじ作品のなかでも、つぎの例では科学的医術と心霊的医術が入りまじっている。

ブレブシデエモス

ところでだれか医者呼んだ方がいいのじゃないか？

クレミュロス

はて、いまではこの町にどんな医者があるかな？ 報酬はただなら、技術もさっぱりときておる。

ブレブシデエモス

（客席の方をうかがいながら）じっと見わたすところ…

クレミュロス

（客席の方をうかがいながら）どうも見あたらん。

ブレブシデエモス

おれにも見あたらんようだ。

クレミュロス

よおし、こうなりゃ、おれが前から考えていたことをやるまでだ。あの人（福の神）にひとつアスクレピオスの社ヤしろに入って寝てもらうのが一番いい。

ブレブシデエモス

そいつはまったくの名案。さあ、ぐずぐずしないで、ともかくなんでもすぐにやってみなくちゃ³⁰⁾。

アスクレピオスの社に入って寝てもらう、というのは明かに心霊療法を意味している。ほかにうつ手がなくなると、頼みの綱はアスクレピオスの医療神だけということになるわけだが、当時の市民がこの神にどれほど信頼を寄せ

ていたかを、この一節でもうかがい知ることができよう。

他方、町で治療にあたっていた医者、市民の見るところ、医療技術に限界があり、信頼の度合いもそれだけやすい。『女の議会』で、便秘に悩んでいるブレピュロスという男は医者さがしに当惑しながら、「だれが医者をつれて来てくれるんだ、どんな医者をも？ 男色通の奴らのなかでこの医術を得意にしているのはだれだ？ アミュウノンは知ってるかな？ どうせ、うんとは言わんだらう³¹⁾」と叫んでいるが、もちろんこれには喜劇的な誇張はあるにしろ、すぐにとびつくことができる医者が少なかったことをよく示している。

それは当時の医療制度とかかわりがあるようにも思われる。クレミュロスが「報酬もただなら、技術もさっぱり」と言ったとき、その報酬とは患者からの医療費を意味している。それは『アカルナイの人びと』に登場するディカイオポリスが農夫の願いをことわるのに、「しかし、気の毒なお人、わしは公医(δημοσιεύων)ではないのだ³²⁾」と言っているが、クレミュロスはその公医を念頭においているのであろう。

公医というのは、古註によれば、「挙手によって選出された公費による医者および公役奴隷で、無報酬で奉仕していた」という³³⁾。これは医者のなかにも奴隷の医者が許されていたという一つの証拠である。

公費による医者については、ヘロドトスがつかえているとおり、各地でおこなわれていた慣習である。デモケエデスという青年は、見よう見まねでペルシア王宮で医術を身につけ、のちにアイギナに住みついてから、国費による給与1タラントで働かれ、ついでアテネ人が100ムナで、さらにポリュクラテスが2タラントで彼を迎えたとのことである³⁴⁾。

しかし、この青年はギリシアの自由人であり、その立場からのべられている。ペルシア王ダレイオスのもとでは捕われの身として奴隷であった(王の部下がそう言っている)が、ギ

リシアに帰国後は市民に復帰したのである。

古註が明かにしているような、医者にも奴隷がいることをのべている他の例は、プラトンの『法律』のなかに見ることができる³⁵⁾。

アテネからの客人

……世の中には、医者もいれば医者の助手もいます。しかしその後者をも、わたしたちはむろん医者と呼ぶでしょう。

クレイェアス

もちろんです。

アテネからの客人

つまり後者は、自由民であろうと奴隷の身であろうと、医者と呼ばれるわけです。しかし〔奴隷の医者(助手)の方は〕、主人の指示、観察、経験にもとづいて、その技術を身につけているのであっても、自由民がみずから学ぶときや、自分の弟子たちに教えるときのように、ものごとの本来のあり方に則ってするものではありません。いわゆる医者と呼ばれている者に、以上の二種類があることを、あなたは認めますか。

クレイニアス

むろん、認めます。

この対話の全体の趣旨は理想的な法律の制定を目的としているので、かならずしも現実社会のありのままの姿をのべているわけではないが、このような医療制度は当時のアテネ市で現実に見られたものと思われる。というのは、この客人は奴隷の医者が実際にどのような活動をしているかを具体的にのべているからである。たとえば「国内には奴隷の病人もいれば自由民の病人もいるのですが、そのうち奴隷に対しては、通常ほとんど奴隷〔の医者〕が走りまわったり、あるいは治療所で待機したりしながら、その診療にあたっています³⁶⁾」というくだりなどは、現実の奴隷医者の実情をつたえている箇所と考えられる。ここで重要なのは、奴隷の患者に対しては奴隷の医者が診療にあたる

という点であるが、しかしそれは厳密に守られていたわけではなく、自由人の医者でも奴隷の患者をたまには診察することがあるような口調で、このあとにのべられている³⁷⁾。

要するに、奴隷の医者が奴隷の患者を診療するのは、自由人の医者が奴隷の患者を診療する手間をはぶくためなのである。そのために、自由人の医者のおくまでも助力者として、奴隷の医者が必要とされたわけである。そのことを、「そのようにして彼は、病人を診療する主人の労苦を軽くしてやるのです」と、アテネナイの客人は説明している。

病気に関するかぎり、ギリシア人は自由市民と奴隷との区別をやわらげているように思われる。病気は生死と直接むすびついているものであり、自由人が日常生活において健康を維持するのが必要であると同様に、彼らが奴隷の健康に注意をはらうのは当然であった。奴隷は無能なのではなく、助力者として有能なのである。したがって健康な奴隷は自由市民にとっては、なによりも得がたい財産であった。

奴隷の医療技術者は、他の家事労働や職場での仕事とはちがって、国家が給料を与えてでも確保しておかねばならなかった必要な存在であったことはまちがいない。アリストテレエスが国制の組織づくりの最初の問題として医者を取りあげているのは、そのことをなによりも証拠づけるものであろう³⁸⁾。〔つづく〕

注

- 1) M. I. Finley, *The Ancient Economy*, Chatto & Windus, London, 1979, p. 73, および拙稿『古代ギリシアの私役奴隷』参照。
- 2) Aristophanes, *Pl.*, 513, Lysias 12, Eratosthenes (19) にはこれらの職業が奴隷の仕事としてあげられている。
- 3) *Ar. Pl.*, 510-519.
- 4) 拙稿『古代ギリシアの私役奴隷——アリストパネエスの奴隷たち』§2, §4.
- 5) プラトン, 『饗宴』, 197B.
- 6) ヘロドトス, 『歴史』, I. 67, 68., 松平千秋訳, 岩波文庫。

- 7) *Ar. Eq.*, 465-470.
- 8) *Ar. Pl.*, 163.
- 9) *Ar. Av.*, 490.
- 10) 拙稿, 前掲, II, §5, iii, 機織。
- 11) 同, 『公役奴隷』, I, §4, iii, 造幣。
- 12) アイスキネエスによると、普通の職人は1日に2オボロス稼いだという。Aeschines, *κατὰ Τιμαρχου* (ティマルコスへの反論), I, 97. 熟練した職人奴隷は1日1ドラクマ (= 6オボロス) で、また当時の公的競売係によって発表された競売リストによると、熟練した奴隷は360ドラクマで売買されていた。奴隷の平均価格は174ドラクマである。ちなみに、一般の役人の日給は2オボロスで、職人奴隷と同額であり、アクロポリスの神殿造営の際には、自由人、奴隷を問わず、石工職人は6オボロスの日当であった。T. B. L. Webster: *Everyday Life in Classical Athens*, Ch. 2, 3, B. T. Batsford LTD, London, 1969.
- 13) Platon: *Platonis Opera*, Camp. J. Burnet, Oxford Classical Texts. 『法律』, VIII, 846 E, (プラトン全集 13, 岩波書店)。
- 14) 具体的な一例として、British Museum 所蔵の油壺にえがかれた黒絵像が参考になる。その復元図によると、炉のかたわらに腰かけて大型の pincers で鉱石をはさんでいる人物がいる。この男は腰に衣を巻いているので、おそらく主人と思われる。前6世紀末。Marjorie & C. H. B. Quennell: *Everyday Things in Ancient Greece*, B. T. Batsford LTD, London, 1968, p. 153. もう1例をあげると、赤絵壺に描かれた青銅工房の内部に、全裸の奴隷が一人は立ち、一人は腰をおろしている。またもう一人の奴隷(髪型から推察)は炉のかげにかがみこんで、主人と思われる鍛冶工が青銅像の組み立てをしている(復元図)。T. B. L. Webster, *op. cit.*, p. 57.
- 15) American School of Classical Studies at Athens: *The Athenian Agora*, 1962, pp. 111-12.
- 16) 哲人ソクラテエスや政治家ペリクレエスも、しばしばこの店をおとづれたといわれる。Diogenes Laertios, 参照。なお、シモンのサイン入り酒盃は現在 アゴラ博物館に所蔵 (No. P22998)。
- 17) T. B. L. Webster はペルシア戦争以前に建てられたとしている。 *op. cit.*, p. 27.
- 18) ポムペイ遺跡の中心といえる Forum に接して、民家の密集する Strada deli Augustali の一角に靴屋の店がある。市場に隣接した小さな店であるのは、シモンの店と共通している。cf. Amedeo Maiuri; *Pompeii*, Istituto Poligrafico Dello Stato, Roma, 1962

- 19) Marjorie & C. H. B Quennell: *op. cit.*, p. 225 (復元図).
- 20) Pelike, 5世紀初期か6世紀後半, Oxford 博物館蔵, No. 563. (V. Ehrenberg, *op. cit.*, Plate X.)
- 21) T. B. L. Webster; *op. cit.*, p. 28.
- 22) Ar., *Pl.* 160-63.
- 23) Ar., *Pl.* 514.
- 24) Ar., *Av.* 490.
- 25) Platon, 『法律』, VIII 849c.
- 26) ムニキアのアスクレピオス像として知られる。作品番号 258, ピレエフスで発見。
- 27) Kynouria 出土の奉納浮彫 (No. 1402)。ほかに No. 1332の浮彫とともに医療関係の貴重な集合像である。
- 28) アクロポリス西斜面で発見, 前4世紀末の作品, No. 3526. S. Karouzou, *National Archaeological Museum, Department of Antiquities and Restoration, Athens, 1968.*
- 29) この像は1916年にテゲア博物館から盗み出されたが, 付近に埋められていたのを, 1925年に発見された。No. 3602.
- 30) Ar., *Pl.* 406-413.
- 31) Ar., *Ec.* 363-365.
- 32) Ar., *Ach.* 1030.
- 33) Fr. Dübner: *Scholia Graeca in Aristophanem*, 1969, Georg Olms Verlag, Hildesheim.
- 34) *Herodoti Historiae*, III, 131, Carolus Hude 編, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis.
- 35) *op. cit.*, 720 A-B. 全集, 13巻, p. 283-84.
- 36) *op. cit.*, 720 c. 全集, 13巻, p. 284.
- 37) *ibid.*, 720 D. 「これに対し自由民である医者は, たいていの場合, 自由民たちの病気を看護し診察します。」(傍点筆者)
ほかに Joseph Vogt は Hippocratic *Epidemics* の例をあげ, 自由人の医者は古くから奴隷の患者を診療していたとし, それは健康を維持させるのに必要欠くべからざる仕事であるためでなく, 彼らの職業上の倫理が真の人間性にもとづいていたからだという。 *Ancient Slavery and the Ideal of Man*, Basil Blackwell, Oxford, 1974. p. 15.
- 38) *Aristotelis Politica*, W. D. Rose 編, Oxonii, 1957, 1281, b 30.

[かわそこ しょうご 横浜国立大学経営学部教授]